

# 公一くん



## 白岩信博

### 随 想

公一は英語がニガ手だ。英語アレルギーに近い。横文字を見ると吐き気がする。テレビも外国映画はあんまり見ないとか。

「公一くんよ、あのなあ、外国じゃこんなちっちゃい、ひとりでションベンもできんような子供でもな、ペラペラ英語しゃべるんだってさ」

なんて担任の坊っちゃんがおどかしても、ただキョトンとしてるだけ。

英語の時間はスペシャルゲストのお客さま。耐え難きをたえ、忍び難きをしのぶ風雪の時間だ。

この公一くん、もとはといえはきわめつきのマジメ人間。性格もきわめて穏やか。だが、何をやっても要領の悪いノロマ人間。スロースターター、スロースターター典型的な人物といえる。

すいすいすいすいすいすいすい

棺桶に片足つつこんだころ、大スターになるかもしれない。

予想通り、学期末に英語の不合格点をとって、担当のうらなりが坊っちゃんのところへやってきた。

「ウヒャー、どうしようもないですねえ、重症です」

うらなりは、青白い顔をグラグラ揺らして驚ろいてみせた。

「教えかたが悪いんじゃないの?」

坊っちゃんはすぐ本心を言う。

「それでしょうかねえ」

うらなりは怒らない。不安そうに、青白い顔をますます青くした。

「いいでしょう。おれが面倒みましよう」

安うけあいするのが、また坊っちゃん悪いクセ。ひょんなことからうる

すいすいすいすいすいすいすい

わしい師弟愛が始まる。

さて、純国産品の慢性英語アレルギーの公一くん。坊っちゃんがやさしそうな問題を選んで訳してくるように言ったら、次の日、横文字のうえにビッシリとアリの行列みたいなふりがなをつけてやってきた。それも、ゴティネイにカタカナのふりがなだ。恐れ入った。坊っちゃんはアリの行列をけしゴムで消させた。

「ふりがなを覚えちゃダメなんだよお、公一くん。いつまでたつたって読めないじゃないか」

ふりがなを消させて読ませてみたがちっとも前に進まない。まるで死んだアリだ。それもそうだろう。突然つかえ棒をはずされたんじゃ、公一くん

でなくともガツタくる。ふりがななしじゃ、闇夜のガラスに鉄砲ぶっ放したも同然、当たるわけがない。座頭市のほうがまだマシだ。

「それにしても、英語ってのはむずかしいなあ。つづりや発音がけっこう面倒なんだよなあ、公一くん」

公一くんにつき合ってみて、坊っちゃん

は初めて知った。

the はなぜ、ザと発音するのか(公一流に、なぜzaでいけないんだろう) enough のしっぽの gh は fV と発音する。though の gh は発音しない。

なぜだろう。しゃっくりの hicough の gh は P、V と発音するんだそうなこりやおどろいた。

自慢じゃないが、われらが日本語だ

ってムズカシイ。一本、二本、三本あるいは一匹、二匹、三匹、本や匹が一、二、三と組み合わさったとたん、ぼん、ほん、びき、ひき、びきと玉虫色に変化する。でも、こんなのは幼稚園の鼻っぺら小僧だつて区別する。人間の人はニンだし、人生の人はジンとなる。ひとを殺せば人殺しだ。恐ろしい。

「やっぱり、日よりも耳なんだよなあ、言葉なんて。教科書で教えるってのがそもそも間違いなんだよ。ウン」

いくら坊っちゃんが納得しても、公一くんの解決にはならない。

ところで、びっしり横文字にふりがなをつけてきた公一くん。we をラと読み、well をラルと読む。なぜなんだ。write という単語を読み進んで謎が解けた。公一くんの思想はこうだ。

「write (ライト、書く) の W はラと読むじゃないか。we や well の W をラと読んでなぜ悪い」

公一くんの英語の学力は、うらなりに聞けば中学一年程度のもらしい。坊っちゃんが、ボール紙にマジックで

「一本、二本、三本」

とでっかく書いて公一に見せたら、ゆっくりと

「いっぽん、にほん、さんぼん」と読んだ。

「坊っちゃんシリーズより」

(福島県立石川高等学校教諭)